オペラ台本

ニホンザル・スキトオリメ

木島始 作

登場人物

男
木
女王ザル
オトモザル
画カキザル　スキトオリメ
画カキザル　ソノトオリメ
他　サルたち

お読みいただくにあたって：

◇このオペラ台本は、木島始による原作の同名童話（１９５７年発表）を読んでオペラ化の意思をもった作曲家・間宮芳生の求めに応じて、木島始が自ら書き下ろしたオリジナルのオペラ台本（１９６５年放送初演）に最も発表時期が近い初出稿（『２０世紀文学』１９６６年４月号掲載）を、著作権者の承諾を得て、オーケストラ・ニッポニカ第３４回演奏会《間宮芳生９０歳記念》公演（２０１９年１月２７日）の特設サイトをご覧いただく方のために公開するものです。

◇間宮芳生はオペラ作曲（１９６４～６５年）にあたり、音楽表現上の判断にもとづき木島始のオペラ台本を自ら改変のうえスコア（総譜）を完成して上演しました。こうした間宮による改変過程および上演成果を、木島が新鮮な驚きをもって見守ったことは、当サイトの「木島始と本作品」コーナーにてご紹介しています。

◇２０１９年に行われた右記再演は、間宮芳生の意思により放送初演時のスコアに基づいて行われ、実際に歌われた台詞は、左記の初出台本とは一部異なります（台本末尾掲載の注を参照）。

◇右記再演の字幕では、字数の制約およびお客様のご理解を容易にする目的で、台本の仮名表記を適宜漢字で表記して映写しました（特に台本に頻出する「画」は「絵」に置換）。

プロローグ　年輪の秘密

男　おや、何だ、この奇妙なかたちは？　このずんぐりして身動きひとつしないのは、何の木の根っこだ？　世界が裂けちまうときみたいな、ひびわれかたをしている。なんだろう、このこまかいひびや割れめのひとつひとつに、まるで地球の破滅したあとの、そうだ、あの核爆発のすぐあとの、眼のくらむようなひどい明るさ、それでいてなんにも見えなくなってしまう真暗闇、真暗闇のなかをあくまで生きのころうと、いのちの芽が、必死に、盲めっぽう、つぎつぎに、細胞分裂していくみたいだが。

木　なかなかいい目をしてなさる。

男　え？　だれだ、おまえは？

木　夢をみるのはおまえさんのおとくい、おまえさんにとってはかけがえのない自由でしょうな。わしらが誰か、おまえさんにとってはとるにたらんことだろう。わしら木のことだって何とでも想像できる。けれども、わしらには、わしらの意志があり、わしらの記憶があり、わしらの希望があるんだから、それを叶えてくれなくては、わしはおもうぞんぶん、わしらの内部の秘密をあんたの眼のまえにひろげていけはしない。

男　じゃ、おまえは、ぼくの腰かけているこの木株。

木　そう。

男　クスノキの木目か？

木　そう。

男　ねじまがった木の芯か？

木　そう。

男　じゃ、おまえは何かをぼくに彫りだしてもらいたがってるんだな、何か内部から掴み出してもらいたがっ

てるのだな。

木　そのとおり、それには、さっきおまえさんが見た、わしらの肌のこまかな記憶のひとつひとつを、手触りでたぐりよせなさるのが一番だね。

男　じゃ……そうだ、目をつぶろうとしょう。ぼくは指先の触覚だけになるとしよう。そしておまえの木目の古いふるい記憶がかたるのを聞くとしよう。

ちょっとみるとひねこびた、おまえの記憶に、いったいどんな秘密や謎がかくされているのか、指先のつたえてくるままに聞くとしよう。

目をつぶったまま見るとしよう。

木　そう、イヌよりもサルがつよかったあの時代に、わしは、森一番の大クスノキで、ぼっかりホラアナを横っ腹にあけていた。

男　え？　サルがイヌよりもつよかったって？

木　しいーっ、サルの女王はね、知えがあって、森じゃあ、みんな、かなうものがいなかったんだよ、ほら、きたきた、みえるだろうが。

女王ザルが画の審査をはじめるのだよ。

第一景　森の肖像画コンテスト

オトモザル　女王さま、これ！　これが一番でございます。

こんなに、知えがあって、考えぶかそうにかけたのは、ございません。

女王ザル　そうかしら？

オトモザル　そうですとも、このしわのふかさは、女王さまのお知えのありあまっていることを証明するものです。

女王ザル　おだまり、うまいことをいって、しわがこんなに多くて、いいことがあるもんですか、しつれいだわ。だいいち、それに、しっぽが、なってないじゃないの、こんなの、とっても、一等賞にできないわ。

オトモザル　なるほど、しっぽね、こいつは気がつきませんでした。でも、しわは、知えのしるしなんですよ。

女王ザル　だまりなさい、だまりなさい、いくら、知えのしるしだなんていって、おだてても、この画みたいに、しわがふかくっちゃ、女性の美しさが、どうなるんです。

オトモザル　じゃ、女王さま、これ、これがいいですよ、ほらこのしっぽ、こんなにぴーんと、しわも、ほら、そんなにふかくはありませんよ。きれいなサルが、描けてますねえ。

女王ザル　だめ、だめ、だめ、だめ。おまえはいったいサルの美しさっていうのを、知ってるのかい、毛並が、わたしのみたいに、ふさふさと光ってなけりゃ、しょうがないじゃないか。この画ときたら、毛並みがまるでドブネズミみたい。だめよ。

オトモザル　なあるほど、それじゃ、女王さま、これ！この絵がよろしゅうございますよ。

ほら、こんなに毛並みがふさふさ光ってますから。

女王ザル　まあ、あきれた、だめねえ、おまえも。

わたしの手がこんなに短いとでもいうのかい、こんな短い手じゃ、木から木へ、さっと渡っていくことなんか、できないじゃないか。おまえ、サルにとって、木のさきから木のさきへ、さっと渡っていく、あのすがたが美しくなけりゃ、どうなるというの。サルだけじゃなく、イヌにまでばかにされるじゃないか。まーあ、おどろいたわねえみんな　(サルの画かきたちは、さっぱり) サルの美しさが、わかってないんじゃないかしら。もうあとは見　必要がないみたいね、おまえ、よく、いい聞かせておやり、サルの美しさってものを、画かきたちに。さ

あ。

オトモザル　かしこまりました。

　さあて、画かきたちよ、きょう森でひらいた展覧会で、おまえたちは腕をふるって女王さまをえがいてみせてくれたのだが、どうも、まだすこし腕まえがたりんのだな、まだだれも女王さまの満足なさる画をかいたものがいない。

　いいか、おまえたち、だいたい、一番美しい女王さまの、美しさが、ほんとうにわかっておるのか。それに、どういうわけで、女王さまが、いちばんみごとな画に一等賞のごほうびをくださろうというのか、わかってるのか、どうだね。

サル㈠　それは

オトモザル　それは？

サル㈠　それはつまり

サルたち　つまり、つまり

オトモザル　つまり、つまりが、つまり、なんだ？

サル㈡　つまり、わたしらの画が

　あんまり、その――

サルたち　あんまり、その――

　あんまり、その――

オトモザル　あんまり、どうだというんだ？

サルたち　つまり、その――

　下手なもんで。

オトモザル　ふむ……それで？

サルたち　それで、その――

　それで、その――

サル1　それで、その――つまり、わたしらを

サルたち　はげましてやろうと――

オトモザル　そんなことは、わかりきってるじゃないか。いうまでもないことだ。だれか、ちゃんと答えられるものは、おらんのか?どうだね？

ソノトオリメ　それは、きっと、女王さまの美しさを、森のはしからはしまでに、知れわたるようにして、美しいサルになろうとおもったら、こういう姿にならなければいけないと、サルというサルにおしえようというおつもりなんでしょう。

オトモザル　そのとおり。では、そのサルの美しさ、女王さまの美しさはいったい、どの点にあるのかという、もうひとつの問いに答えてもらうとしようか。

スキトオリメ　いいや、ちがう、女王さまは、美しさということが、すぐに消えていってしまうので、それがこわいのだ。じぶんの後継ぎになれるじぶんより美しいサルを生めないので、それで、じぶんの美しさを画にかいて、永久にのこしておきたいのだ。

オトモザル　むー、なにをいう！こいつ。

女王ザル　まーちなさい、ふうん、ましなことをいったわね。おまえ、何て名前のサルだね？

スキトオリメ　スキトオリメ、ともうします。

女王ザル　スキトオリメ、ふうん、おまえの画をもってきてごらん。

木　さあ、そのときは、噂が、森から森へ、サルからサルへ、月の光のようにとんでいって

サルたち　《こらしめられるぞ、こらしめられるぞ、おもろ、おもろ、おもろ》

そうささやきあっては女王ザルとスキトオリメとをかわるがわる、みんなで見ていた。

男　で、スキトオリメの画ってのは、どんなだったの。

木　それは……毛並みがふさふさしたサルと、ガイコツとが、ななめにかさなりあっていて、そのガイコツの
シャレコウベの眼の穴に、キクの花が一本さしこんである、そんな画だったよ。

男　それで、女王ザルは怒らなかったの。

木　そこが、女王の知えのあるところでね。

女王ザル　おもしろい画をかくわね。

オトモザル　いや、こんなのは子供だましでございます。

女王ザル　いいえ、おまえにはわかっていないの。だまってらっしゃい。
このサルのみどころは、だれも、わたしだって見すごしていたものを、見えるようにしてくれたことよ、さあ、
おまえに一等賞をあげよう。

サルたち　一等賞、一等賞、一等賞。
　あいつが一等賞。
〱〱（リフレイン）
一等賞はカキ三つ
〱〱（リフレイン）
あまいカキ三つ
〱〱（リフレイン）
あいつがもらったぞ
〱〱（リフレイン）
カキ三つ　もらったぞ
〱〱（リフレイン）
もらったぞ　〱〱
・・・・
もらったぞ！

第二景　（間奏曲）サルたちの姿とたましい

木　スキトオリメという名のかわったサルは女王のこころを見ぬいていた。
女王ザルは満足をするということがない、
女王ザルは満足をするということがない、
つぎからつぎへと画をかかせ、
つぎからつぎへと獲物をはこばせる、
満足をしないところに、女王の女王らしさがあったのだ。
スキトオリメもまた、画かきザルとして、
サルというサルの真相をえがきつくそうと、
はるかとおく、オナガザルやオラウータンの国まで足をのばし、
ふと、サルデアッテサルデナイ人間、というもののあらわれたことを耳にした。
スキトオリメは、一等賞をもらったあと、
こうして旅に出たまま、かえってはこなかった。

おさまらないのは女王ザル。
女王ザルはおさまらないよ。
画かきザルたちはスキトオリメのまねばかりして、
ガイコツの画がすごい流行。
女王は森じゅうのサルたちに、命令をくだした。
ガイコツをかいたらほらあないきの刑罰！
すると、ぴたりとガイコツの画のまねはなくなった。
それでも、女王ザルは満足しない。
女王ザルは、満足をするということがない。
美しいすがたをいつまでも、サルたちの手で空いっぱいに、描かせておきたい気持。
満足をしないところに女王の女王らしさがあったのだ。

第三景　美しい女王ザルの望み

女王ザル　ずいぶんながいあいだ、おまえは旅行をしてきたんだね。この森をはなれて、何をみ、何をしてきたんだね。はなしてごらん。
スキトオリメ　わたしは、サルのタマシイがわからなくなったのです。わたしは、サルにはできないことをする、サカナのことばや、トリのことばをおぼえて、水のなかや空中をおよぐことのできるサルを、描いてみたのです。
女王ザル　ふうん。みせておくれ、なるほど、はははは。いいじゃないの、おまえ、サルに翼をつけたり、水かきをつけたり、ねェ、はははは。
わたしは長いこと待ってたわ。わたしはすんだ泉の水鏡でもう、じゅうぶん、お化粧をして待っていたんだから、さっそくわたしをかいておくれ、サルのセカイイチにね。
スキトオリメ　――間――（M）――間――
女王ザル　かいてるんだろうね。じっとモデルになってるのも辛いもんだわ。
スキトオリメ　――間――（M）――間――
女王ザル　おや、まだまっ白じゃないの、どうしたの、まだ、できないの？
スキトオリメ　いえ、もう、とっくにできております。
女王ザル　できておりますッて、どこにわたしがいるの？
オトモザル　なあんだ、まっ白だね、こりゃ。
女王ザル　この画のどこにわたしがいますか？
オトモザル　まあまあ、そうお怒りにならないで、女王さま。女王さまのキヨラカナオココロを白一色でえがいたものでしょう。
女王ザル　ふうん、まるで、謎なぞね、これはこれでほうびをあげるわ、だけど、こんどはココロじゃなくて、カラダをかいておくれ。
スキトオリメ　カラダはココロときりはなせません……
（ひとりごと）フン、このカキは、あんまりあまくないな、ココロがまっ白でなんか、あるものか、まんなかに黒い点が一つそれが女王さ、セカイイチだけど、まわりがゼロ。セカイイチ美しくて知えがあると思っている

のを、遠いところから見たところさ。
女王ザル　ココロといっしょに、わたしはカラダをかいてもらいたいんだよ。
オトモザル　カラダでしたら、女王さまの美しさをえがかせるのにうってつけ一番の画カキザルのソノトオリメというのがおります。そっくりそのとおりにかきあげます。
女王ザル　えい、もうしょうがないね、そのサルをよんでらっしゃい、他の画カキザルでは、生きてピチピチしているこのわたしを、動かないところに閉じこめることしかできないんだから。ええェ、でも、しょうがないわねェ、そのそっくりそのとおりかく画かきザルをよんでいらっしゃい。
オトモザル　はい、よんでまいりました、女王さまのすがたを、どのようにでも、そっくりそのまま、やさしそうに、けだかそうに、りこうそうに、かきあげます。

さあ、できあがりました。こんな画は、どこのサルの国を、さがしてもみあたりません。
これ、これです、これで、女王さまの美しさは、亡びないものになりました。
女王ザル　ふうん、これがね、まあ、似ていることは似てるけど、でも、きれいすぎるわ、きれいすぎて、息がかよってないわ。
きれいすぎる画は、わたしじゃ、ありませんよ。まあ、シブガキくらい、ほうびにやっておくれ。
わたしは、わたしの全部を、永久に美しいものとして、みんなにあがめてもらいたいのよ。
もうこれ以上年をとってはいけないわ。
スキトオリメをよんでおくれ……
スキトオリメかい?
スキトオリメ　はい。
女王ザル　おまえは、わたしに見えないものを見ている、ただ一匹のサルだよ、一等賞をおまえにやったのも、おまえのいったとおり、わたしが、わたしの美しさを永遠のものにしたかった、それをおまえが見ぬいたからだよ、あー、わたしは、サルデアツテサルデナイものになりたいの。
スキトオリメ　それは、人間というものです。
スキトオリメ　人間、それでは、わたしを人間にかいておくれ。
女王ザル　じゃ、おまえ、人間以上に知えのあるものは、どう、いるのかい、いないのかい?
スキトオリメ　人間はサルより、ずっときたなくて、むごたらしいことをいっぱいします。
スキトオリメ　それは、おります。
女王ザル　それは、だれだね?
スキトオリメ　それは、カミサマといわれています。
女王ザル　カミサマ?
スキトオリメ　そうです。カミサマは、永久に死なない、といわれています。
女王ザル　永久に!　それじゃ、それじゃ、わたしをさあ、その永久に死なないサルノカミサマのように、かいておくれ、さあ。
スキトオリメ　カミサマは、美しいかどうかわかりません。
女王ザル　えー、いいわよ。
スキトオリメ　カミサマは、みんながおそれるものです。
女王ザル　いいわよ。
スキトオリメ　カミサマに会うと、みんな、お化けになります。化かされるのです。
女王ザル　えー、なおさら、いいわよ。
スキトオリメ　女王さまをみながらわたしがサルノカミサマをかくと、みんなが女王さまをその画のように思いこんでしまいます。

女王ザル えー、なおさら、なおさら、いいわよ。
スキトオリメ それでは、かいてみましょう、どうぞ、おめかしをして、すましてください。
女王ザル どう、できたかい？
スキトオリメ いいえ、まだ。
女王ザル すこしはかけたのかい？
スキトオリメ いいえ、まだ、ちっとも。
女王ザル わたしが、まだサルノカミサマに見えないのかい？
スキトオリメ いえ、みえることはみえますが。
女王ザル が、どうしたというの、ええっ⁉
スキトオリメ そう、つまり、その形がきまらないのです。
女王ザル えー――、おまえのまえにいるこのわたしに、形がないというのかい？形がきまらないとか何とかいって、おまえは、また白紙でココロをかいたなどと言わせはしないよ！
スキトオリメ いまの女王さまは、ほら、もうそのまえの女王さまと、もうちがいます。そらその、もうそんなに鼻の穴が大きく、そらこんどは小さくなっておいでです。
女王ザル 怒ったからだわ。おまえが怒らすからだよ。
スキトオリメ さようです。さよう、怒った女王さまがよろしいか、泣いた女王さま、笑った女王さまがよろしいか。
女王ザル どれもいやだわ、どれも。わたしをカミサマのように描いておくれ。
スキトオリメ かしこまりました。できるだけのことをやってみましょう。でも、あすまで待ってください。それから、いちばんおいしいカキとクリとを、八つずつください。

第四景　画カキザルの投獄

木 追いつめられたスキトオリメは、はらいっぱい、カキとクリを食べてねた。そうだ、食べすぎてねた夜は、むやみに夢を見るものだ。
スキトオリメ 《うーん、うーん》
木 スキトオリメは、もがく
もがいて、もがいて
いくども、いくども
ねがえりを、うって
もがけば、もがくほど
身動き、ひとつ、
できなくなってくる。
そのかわり、森の世界が
ギラギラ、ギラギラ
ひかって、すきとおって
ぐるぐるまわって、
こんがらかって
のしかかって、見えてくる。
スキトオリメ 《だ、だれだ、だれだ、おれをしばる糸を引くのは？ んむ――、う、うごけないッ。》

木 はっと、スキトオリメは夢のほうが今までのじぶんの画より真にせまっているのに気がついた。

スキトオリメ 《そうだ、女王ザルを見えないクモの巣にしばってやろう》

木 スキトオリメは、朝はやく、森でいちばんたかい木のこずえにのぼってみると、腹をすかしたサルたちが、サルたちが、いっぱい、森の木々の枝に、すずなりになって、じぶんのほうを見ているのに気がついた。

木々かサルか、サルが木々か、すずなりになって。

さあ、スキトオリメは、木をおりると、女王ザルに約束した、サルノカミサマの画を、力いっぱい、ありったけの勢いでいっきにかきあげていく。

スキトオリメが《できあがりました》と、女王ザルのところに画をもっていくと、女王ザルは、その画をみてすぐに、《牢屋へいれなさい》と命令した。オトモザルは、スキトオリメを引ったくり、牢屋にとじこめてしまったのだ。

男 で? 牢屋というのは、どこなの?

木 わしの腹の中さ、引っくくられたサルなんか、何びきだって放りこめたわしの腹のなかさ。そら、おまえさんがいま坐っているところだよ。そこは、森でいちばんふとくて高いクスノキだったわしの、ぽっかりあいたホラアナの底だったのさ。

男 ふーん、で、そのスキトオリメの画というのは、どういう画だったの。

木 それはオトモザルにもわからんかったんだ。見かたしだいで、どうにでもとれる画だったんだな。

第五景 奇怪な絵 ざわめく森

オトモザル 女王さま、あいつめ、みごとな美しい女王さまの画をかきおりましたが、どうして牢屋にいれられたのです? この画の女王さまをごらんなさいまし、すくすくと伸びた木の枝を、右から左へさっとながい両手をのばし、鳥よりもかるがるとわたっていかれる毛のふさふさとした女王さま、これは、あのスキトオリメがかいた画のなかで、一番みごとな画でございます。

女王ザル けしからん画だわ (自問自答調で) おまえにわからないわけは、ないはずよ、すくすくと伸びた木の枝だなんて、その木の枝が何かよくみてごらん! 細長いサルの指になってるじゃない。とくいになって手足をのばしているわたしが、じつは、ほかのサルの掌のなかでおどってる、そんな画だわよこれは (また対話調にもどる) けしからん画だわよ。

オトモザル ふうん、そうですかな、わかりませんが。なにしろ、あやつは、みえないものばかり、反対ばかりえがくやつです。

あいつは、敵国ワンコクのまわしもの、スパイかもしれません、だいたいニホンザルいがいのものの言葉をしりすぎています。

女王ザル もういいわ、おまえは、おさがり!

ふうーん、へんな画をかきおった、これがカミサマというのかしら、こんなのじゃなくて、カミサマになりたいわねえ。

なんだか、森がざわついてきてるようだわ、いちばん高いこずえへいって、見てくるとしよう。なんだか、いやな風むきだわ、これは、おや、あれは風がなっているのかしら、ひや、ひや、ひゃっふう、ふう、ふうひゃら、ってあの風は何のかぜ。何のかぜって何のこと、こそこそ、かさかさ、ざざざ、ああ森じゅうのなんて、きみのわるいざわめきようなのかしら、なぞなぞかけられて、かこめ、かこめ、かこまれるのはこのわたし、けちんぼうたちにかこまれる、くいしんぼうたちにかまれる、かこまれる、かまれる、かこまれる、なぞなぞかけられて、ああ、

《あれは、オトモザルの手だ！　オトモザルの手だ！》

《あれは、スキトオリメの手だ！　スキトオリメの手だ！》

どこへいっても、サルたちの目つきが、へんなうわさをけしかけてくる。ああ、ああ、ああ、あの画のなぞが、わたしの目にこびりついてしかたがない。

そうだ、わたしは、どうしてもカミサマにならなくてはいけないわ。

オトモザル　女王さま、どうもイヌたちめが、攻めてくるようです。

女王ザル　ええ、わかってるわ。わたしはこれからカミサマになるんですから、わたしそっくりの画を、みんなにもたせて、そしていつもおがむようにさせなさい。そうすれば、サルたちはみんなカミサマにまもられてイヌなんかに敗けやしないんだから。

オトモザル　それがよろしゅうございます。女王さまそっくりの画は、ソノトオリメのかいたのがよろしゅうございます。

おうい、サルたち、ニホンザルはみんな、あつまってこうい！

さあ、みんな、この画がみえるか、よくきけ。

『わしたちの女王さまは、イヌどもとのたたかいにそなえて、きのうからサルノカミサマになられた。みんな、この画をおまもりにくださるから、いつどこででもおがまなくてはいけない』

いいか、これが、われわれニホンザルのきまりなのだ。これから、イヌどもとたたかわなけりゃならんというとき、この画をもって、ふところにいれて、あぶないとき、こわいときにおがんでいれば、みんなサルのカミサマにまもられて、死んでも死なないようになる。わかったか。

サルのコーラス　サルのカミサマ　カミサマ

死んでも死なない
サルのカミサマ
死んでも死なない
サルの女王さま
守ってくださる
サルのカミサマ
イヌどもなんか
攻めてきたって
こわくなんか
ないそうですな

第六景　ホラアナの爪あと

木　わしの腹のなかにとじこめられた、あの画カキザルのスキトオリメはどうしたか。あのスキトオリメは、見えないものをみ、聞えないものをききながら、ホラアナの壁、つまり、わしの腹のなかに、四つの手の爪で、ガリガリ画をかきつづけおった。あいつにとっては、画をかかないのは死んだのと同じことだったのだ。爪がはげて、指の骨でひっかくようにして、画をかいてゆく。ふしぎなことに、その画はサルノカミサマをおがんでいる、めくらめっぽうのサルたちを、じつによくえがいておった。あいつのきざんでおったのは、サルノユーレイの行列していく画だった。

サルノユーレイの行列していく画だった。
まもなく、イヌたちが、しょっちゅう森に攻めてくるようになった。そしてサルたちはひっしでイヌとたたかいをした。
サルたちのたたかいは、なかなかすさまじかった、サルのカミサマの画をもったサルたちは、そのお守りにまもられて、どうしてどうして敗けやせん。敗けそうになるとスルスル、木にのぼって、そうして、カミサマをおがんで、またいきおいをもりかえし、攻めかえす。
そうして、サルとイヌとの、ながく、ながあい、気がとおくなるような戦争がながながとつづいた。
しかし、イヌたちのほうが、サルたちよりもさきに、サルデアッテサルデナイ人間になつき、人間の知えにしたがうようになった。
それで、形勢は、すっかり、決ってしまったようなものだった。森は、イヌの吠える声よりも、もっとおそろしい人間たちの武器のとどろきに、おびやかされるようになった。
わしたちも、からだごと、根っこごと、ふるえるようになった。
それから、わしたちが、からだごと、炎につつまれるあの日がやってきた。

第七景　末期の耳

女王ザル　もうわたしが姿をみせなくても、みんなはわたしの若くて美しい画をもってるそうだね。

オトモザル　そうですとも、女王さま。みんなすっかりおなじ画をもってます。

女王ザル　そう、それでは、わたしも安心して死ねるわね。こう、年をとってからというもの、わたしは老いぼれた姿をみんなの目にさらすのがいやだから、すっかり隠れどおしだけど、みんながわたしの若くて美しい画をだいている。それをきいて、わたしもほんとうに安心だよ。
ああ、わたしは、死にたくない、死にたくない、死にたくない。死んでも、死にたくない。死んでも、いつまでもいつまでもカミサマをまつるように、いってありますね。

サルのコーラス　だいじょうぶ　だいじょうぶ　だいじょうぶ
ごいっしょ　ごいっしょ　〳〵
だいじょうぶ　ごいっしょ　〳〵

オトモザル　あの声がきこえませんでしたか。どうか、安心して、目をおつぶりください。死ぬのは、われわれ生きているものみんなのさだめ。
わたしは、女王さまが亡くなられても、決して亡くなられたことをみんなに知らせせません。サルたちは、みんな、若くて美しい女王さまと、いつまでもいっしょの気持でおります。

女王ザル　そう、
ああ、でも、わたしは、死にたくない
死んでも……。

第八景　炎あれくるう

木　*女王も年には勝てなんだ。サルたちは、女王の死んだことを知らなんだ。画カキザル、ソノトオリメのかいた、美しい女王そっくりの画をお守りに、サルノカミサマをおがんでいた。
と、とうとう、イヌたちは人間に、森をすっかり焼きはらわせるようなことをした。むごいことをしたもんだ。*

サルたちは、逃げ場がなくなって、わしの腹の中、スキトリオメがとじこめられたホラアナのなかに、おおぜい、あとから、あとから、逃げこんできた。

木のコーラス 炎が、そのあとを追いかけてきて、おりかさなって悲鳴をもだせなくなっているサルたちのうえを、いく度もいく度も、焼きくるっていった。

木 わしらは、青い葉っぱをつけたまま、炎の舌のさきで、手足をなめるように食いちぎられ、煙りにむせかえって、倒れていく。わしらはみな、皮が焼けおちる。腕がとぶ。芽が燃え、胴がはじける。樹液が、樹液がふきあがる。あーッ　あーッ。

木のコーラス 地とサルたちの血と樹液とがまじって、わしの腹の底は、生きたまま、生きものを煮えたぎらせる地獄の釜……その釜からの匂いをイヌたちがかぎつけぬはずはない。サルたちの生きた肉の焼けこげる匂いを追って、森の中をイヌたちが、鼻をびくつかせながら、駆けてくると、わしのまえで、いっせいにものすごく鳴きたてるのだった。

エピローグ　芽生えの肌ざわり

木 イヌたちには、サルたちの屍のしたになった、スキトオリメの画がわかったろうか。サルノカミさまを信じて、おりかさなって死んでいった、サルたちの、そのうえを、炎が、あれくるったのだから、スキトオリメの爪が必死に彫った画などは、よほど、よくわしの腹の中を見るものでないと、みえるものではないのだ。ごらん！　よくごらん！　サルたちのいのちがおりかさなって、その上を炎があれくるったのだから、わしらのざらざらした木目には、おまえさんのみなれないしるしや、画文字がいっぱい、しきつめて、見えるだろうが、……

男 うんうん、見える見える。いままで、せんぜん見えなかったものが見えてきたぞ。

木 それだ、それが、スキトオリメの画なんだ。地のなか深く生きていた、わしらの根っこから、また芽をふきだし、イヌたちには何度みても、何のことかわからなかった信号や、暗号が、おまえさんの胸の中で、いま、おどりだしているんだ。その、おまえさんの胸のなかに、地ひびきのように、おどりだしている、スキトオリメの画の動きを、さあ、いつまでも、たどっていくがいい。

〔20世紀文学研究会編『20世紀文学』第4号　特集：ドラマ（南雲堂，1966年4月）4頁〜18頁掲載〕

◇木島始台本におけるひらがなの多用、および「知え」（知恵）などの独特の用字は、「子どもの絵本の仕事で、漢字渡来前後の日本語を考えあわせるという、ちょっと途方もないわたしの空想的な自己訓練のくりかえし」〔木島始著『日本語のなかの日本』（晶文社、1980年）〕によるものと思われるため、すべて原本のまま掲載しています。

◇第八景冒頭の二つの段落（＊印～＊印の部分の「木」の台詞）は、実際のオペラでは、間宮芳生により第七景の最後に移動されて音楽が付けられています。

◇その他、オペラ作曲に際して間宮が行ったテキスト追加、変更、削除の例：

例一：「どういうわけで」→「ど̃ーゆーわけで」（第一景　オトモザル）

例二：「ふうん。」→「u ye··eeu··uu、フーン」第二景　女王ザル）、

例三：「あいつは、敵国ワンコクのまわしもの、スパイかもしれません、だいたい、ニホンザルいがいのものの言葉をしりすぎています。」→「あいつは、もシかすると、てきこくワンコクのまわしもの、スぱいかもしれません、それにだいたい、あいつ　はッ」～「ニホンザルいがいの…」以下はカット（第五景　オトモザル）